

反核 医師の会 ニュース

第49号
2012年1月25日

Physicians Against Nuclear War (PANW)
核戦争に反対する医師の会事務局

〒151-0053 東京都渋谷区代々木2-5-5
新宿農協会館 全国保険医団体連合会内
電話 03(3375)5121 FAX 03(3375)1885
e-mail: panw@doc-net.or.jp
http://no-nukes.doc-net.or.jp/

第22回反核医師の会

「この世界に核兵器も原発もいらぬ」

埼玉県で開催、400人参加



「第22回核戦争に反対し、核兵器の廃絶を求める医師・医学者のつどい」 in 埼玉
核兵器の廃絶を求める医師・医学者のつどい in 埼玉
3月11日の東日本大震災・



408人が参加した「第22回核戦争に反対し、核兵器の廃絶を求める医師・医学者のつどい in 埼玉」

反核医師の会代表世話人 児嶋 徹

玉（反核医師のつどい）が2011年11月5、6の両日、埼玉県の「さいたま市民会館うらわ」で開かれ、全国の医師・歯科医師や市民ら408人が参加した。



反核医師の会常任世話人 武居 洋

普天間基地問題 重大局面に

名護市長が「受け入れ」表明、市民過半数は「反対」
1996年4月橋本—モ

間飛行場の重大な危険性にかんがみ、今後7年以内の全面返還で合意。ただし米側はこれに代わる代替基地を要求。嘉手納、北谷、読谷などの本島中部地区の自治体、さらには那覇市沖合など数カ所の自治体に対し、代替基地の受け入れを打診したが、いずれの自治体も拒否した。1996年9月、米軍基地整理縮小と地位協定の見直しを問う全

多彩で緊張感のある、実り多いものであった。
(2面・3面に関連記事)
被爆国の医師・法律家の使命語る
冒頭の文化企画、斉藤とも子さんの詩の朗読は参加者の感性を揺さぶった。
埼玉ならではの記念シンポジウム「放射線被ばくと医の倫理」は圧巻であった。肥田舜太郎氏の自らの被爆体験の描写力と、被爆者に寄り添って、医師としての鋭い観察力を活かして活動してきた足跡は感動を呼んだ。田中熙巳・被団協事務局長は被爆者の立場から、核兵器の存在が絶対許されることではないこと、その存在に対する日本政府の無に等しい言動、命の尊厳を最も尊重する医師への期待が語られ、私たちの今後の活動に

対し沢山の示唆をいただいた。大久保賢一弁護士は、核兵器廃絶と被爆者支援を目的として、被爆国の法律家としての特別な使命が語られ、「非核三原則」を「2・5原則」にしようとしている意図、「核密約」の背景など法律家の視点での論点が明快に述べられた。
核兵器廃絶に向けた国会議員シンポジウムは、初めての企画であり、核兵器廃絶は思想・信条を超えてやり遂げられる具体的な課題になることが示唆され、今後、国政への働きかけの私たちのエネルギーが活性化されるものになった。
被爆者医療、内部被曝など3分科会
3つの分科会は、参加者も多く、活発な議論が交わ

された。第1分科会「被爆者医療を受け継ぐ」には、医学生はじめ青年医師の参加が多く、長年被爆者医療に携わってこられた園田久子先生が、プレスコード、ABC、日本政府の被爆者への対応、原爆症認定集団訴訟にいたる道筋など歴史を振り返りながら語り、幾人もの医学生が被爆者医療を受け継ぐという決意表明が述べられるなど充実したものとなった。第2分科会「福島原発事故」今後、医師・医学者に求められること」では、ホットスポットで暮らす母親から「医師・医学者に望むこと」の発言を受けながら、学びつつ熱い議論が交わされた。反核医師の会に対しての問題提起などもあり継続された議論が必要とされた。第3分科会「内部被曝

「内部被曝と健康被害」には、矢ヶ崎克馬氏、松井英介氏にご講演いただき、国際的組織の内部被曝の見解、チェルノブイリでの内部被曝被害の実態、今後予想される福島原発事故後の内部被曝の影響などが科学的に述べられた。
今日まで広島・長崎の被爆者に対して内部被曝を否定し続けてきた歴代日本政府、そしていわゆる「御用学者」との対比が明快になり、科学は本来人間の尊厳を守り、人類の進歩に役立つものでなければならぬ、と確信を得るものになった。青山委員長はじめ実行委員会の諸先生に感謝するとともに、つどいの成果を前進させ、ICAN運動を広め、NWC（核兵器禁止条約）締結に向けさらなる奮闘をしよう！

くる。日本政府は「日米同盟を遂行することが沖縄の負担軽減になる」と事あるごとに付け加えるが、果たしてそうであろうか。すでに欠陥機種といわれている垂直離着陸機MV22オスプレイの普天間配備も米側から伝達されている。基地であるが故の事件事故は絶えることなく続き、県民はその度に犠牲になっている。米軍の「沖縄自由使用」と植民地政策同然の関係がいつまで続くのか。
新安保50周年はすでに過ぎ、このような日米関係がさらに50年100年も続くことを沖縄県民は耐えられないだろうか？ もっと地元の要望を聴き入れた民主主義的主権国家の関係で安保条約見直しの議論をなすべきではなからうか。

1996年4月橋本—モ間飛行場の重大な危険性にかんがみ、今後7年以内の全面返還で合意。ただし米側はこれに代わる代替基地を要求。嘉手納、北谷、読谷などの本島中部地区の自治体、さらには那覇市沖合など数カ所の自治体に対し、代替基地の受け入れを打診したが、いずれの自治体も拒否した。1996年9月、米軍基地整理縮小と地位協定の見直しを問う全

多彩で緊張感のある、実り多いものであった。
(2面・3面に関連記事)
被爆国の医師・法律家の使命語る
冒頭の文化企画、斉藤とも子さんの詩の朗読は参加者の感性を揺さぶった。
埼玉ならではの記念シンポジウム「放射線被ばくと医の倫理」は圧巻であった。肥田舜太郎氏の自らの被爆体験の描写力と、被爆者に寄り添って、医師としての鋭い観察力を活かして活動してきた足跡は感動を呼んだ。田中熙巳・被団協事務局長は被爆者の立場から、核兵器の存在が絶対許されることではないこと、その存在に対する日本政府の無に等しい言動、命の尊厳を最も尊重する医師への期待が語られ、私たちの今後の活動に

対し沢山の示唆をいただいた。大久保賢一弁護士は、核兵器廃絶と被爆者支援を目的として、被爆国の法律家としての特別な使命が語られ、「非核三原則」を「2・5原則」にしようとしている意図、「核密約」の背景など法律家の視点での論点が明快に述べられた。
核兵器廃絶に向けた国会議員シンポジウムは、初めての企画であり、核兵器廃絶は思想・信条を超えてやり遂げられる具体的な課題になることが示唆され、今後、国政への働きかけの私たちのエネルギーが活性化されるものになった。
被爆者医療、内部被曝など3分科会
3つの分科会は、参加者も多く、活発な議論が交わ

された。第1分科会「被爆者医療を受け継ぐ」には、医学生はじめ青年医師の参加が多く、長年被爆者医療に携わってこられた園田久子先生が、プレスコード、ABC、日本政府の被爆者への対応、原爆症認定集団訴訟にいたる道筋など歴史を振り返りながら語り、幾人もの医学生が被爆者医療を受け継ぐという決意表明が述べられるなど充実したものとなった。第2分科会「福島原発事故」今後、医師・医学者に求められること」では、ホットスポットで暮らす母親から「医師・医学者に望むこと」の発言を受けながら、学びつつ熱い議論が交わされた。反核医師の会に対しての問題提起などもあり継続された議論が必要とされた。第3分科会「内部被曝

「内部被曝と健康被害」には、矢ヶ崎克馬氏、松井英介氏にご講演いただき、国際的組織の内部被曝の見解、チェルノブイリでの内部被曝被害の実態、今後予想される福島原発事故後の内部被曝の影響などが科学的に述べられた。
今日まで広島・長崎の被爆者に対して内部被曝を否定し続けてきた歴代日本政府、そしていわゆる「御用学者」との対比が明快になり、科学は本来人間の尊厳を守り、人類の進歩に役立つものでなければならぬ、と確信を得るものになった。青山委員長はじめ実行委員会の諸先生に感謝するとともに、つどいの成果を前進させ、ICAN運動を広め、NWC（核兵器禁止条約）締結に向けさらなる奮闘をしよう！

くる。日本政府は「日米同盟を遂行することが沖縄の負担軽減になる」と事あるごとに付け加えるが、果たしてそうであろうか。すでに欠陥機種といわれている垂直離着陸機MV22オスプレイの普天間配備も米側から伝達されている。基地であるが故の事件事故は絶えることなく続き、県民はその度に犠牲になっている。米軍の「沖縄自由使用」と植民地政策同然の関係がいつまで続くのか。
新安保50周年はすでに過ぎ、このような日米関係がさらに50年100年も続くことを沖縄県民は耐えられないだろうか？ もっと地元



核戦争による地球最後の日までの残り時間を概念的に表示した「終末時計」を管理する米誌「ブレティン・オブ・ジ・アトミック・サイエンス」が1月10日、時計の針を1分進め、「残り5分」になったと発表した。▼同志は2010年1月、オバマ米大統領が09年のプラハ演説で「核なき世界」を唱えた後、世界の核軍縮機運が高まったとして、時計の針を1分戻し「残り6分」としていた。しかし、現在も「発射可能な核弾頭がまだ2万発あり、地球上の生物を数回全滅させるのに十分」であることや、昨年の福島原発事故や核（技術）拡散の傾向、核保有国の中で核軍縮が進まないことに対する強い危機意識のもと今回、07年1月から10年1月までの「残り5分」に逆戻りさせたのである▼しかし、このニュースのリードに「来るXデーに備えろ!!」とあったのには驚きがつかりした。核戦争の起こる日、Xデーに備えることのできる人間は誰一人いない。自分たちだけは生き残れると信じている人がまだいるのか▼さて、スリーマイル、チェルノブイリ、福島原発過酷事故を経て、「原発のない社会」への機運の高まりを忘却し、核技術の先進性を信じ原発を輸出しようとする人々、「それでも核エネルギーは必要だ!」と叫ぶ人々の存在がある。核兵器と原発を必要とする人々に対抗し、今年も核兵器と原発のない社会を目指して頑張ろう。

「核なき世界へ」国会議員シンポジウム

5政党から参加、核廃絶への思い語る



反核医師の会常任世話人 松井 和夫

この一年、残念ながら核廃絶に関して国連などの国際舞台では閉塞状態が続

核廃絶望むも多忙で議論の機会なく

全体を通して明らかに核廃絶への温度差があるもの

今回のシンポジウムは、核軍縮に積極的に取り組む国会議員から「核兵器禁止条約」

市民の働きかけが不可欠 市民ができる活動に関し



パネリストとして登壇した国会議員の(右から)川田龍平、阿部知子、井上哲士、浜田昌良、稲見哲男の各氏

今回のシンポジウムのような政治家との交流を単発で終わらせること

第1分科会

被爆者医療を受け継ぐ

医学生・青年医師を交えて



東京反核医師の会 向山 新

第1分科会は青年医師、医学生を中心に48人の参加者で行われた。

被爆直後、その被害が世界に発信されるとGHQのプレスコードによって被害の隠蔽が謀られる一方、ABCにより原爆の兵器としての威力の調査が行われたこと。

彩の国からのアピール
この世界に核兵器も原発もいらない—核兵器禁止条約の制定で一日も早い「核兵器のない世界」を実現させよう！
私たち、核戦争に反対する医師の会(反核医師の会)は「この世界に核兵器も原発もいらない(彩の国から核兵器禁止条約の制定を)」をテーマに2011年11月5日~6日に、首都圏・埼玉で「第22回核戦争に反対し、核兵器の廃絶を求める医師・医学者のつどいin埼玉」を開催、408名が集いました。

高齡化した被爆者の介護、癌が問題
さらに、原爆症認定集団訴訟の経過、代々木病院での長年の臨床のまとめから、これからは被爆者の癌の問題がますます重要であること、高齡化した被爆者の介護の問題についてもこれからの問題であることをお話された。
新たな「被ばく者問題」
2番目は、原爆症認定集団訴訟弁護団として活躍されてきたこと、福島で若い医師たちに新しい「被ばく者問題」に取り組んでほしい、一人一人の被災者を救ってほしいと熱いエールが送られた。



第1分科会で発言する坂田氏(左)と園田氏

第2分科会

原発事故問題について
医師・医学者に求められることとは何か

企画責任者／核戦争を防止し
平和を求める茨城医療人の会
核戦争防止神奈川県医師の会

大前比呂思
高橋 健作



大前比呂思



高橋健作

本企画では、福島原発事故後の放射線による健康被害をめぐり、現状や問題点について、会員の貴重な経験や疫学的視点を踏まえて整理し、医師や医学者、特に反核の下に集う医療者に求められることを探った。市民

団体からの要望や、南相馬で除染活動を続ける東大・児玉龍彦教授をはじめとする多くの方からメッセージも寄せられ、定刻を過ぎてもホットな議論が続いた。斎藤紀医師（福島市・医療生協わたり病院）の講演からは、3月11日の事故以来、今なお年間推定累積線量が5ミリシーベルトと推定される地域で、地域住民のニーズに応じた医療や情報を提供していくことの難しさが伝わってきた。避難地域に指定された飯館村でも、苦渋の選択の中での避

難した住民は少なくなく、除染に限度があるからといって、避難が、必ずしも最適な解決策とならない場合も多いことが、浮き彫りになった。晩発性健康障害に關する、放射線の危険と安全に關する評価と発言は難しく、情報の錯綜と混乱が地域社会に与える負の影響は大きい。福島県内のかまりの地域で、地域社会はまさに崩壊の危機に瀕しており、復興を目指す中で住民一人一人が価値観の再確認を迫られている。

先入観なき診療と傾聴

原発事故後に盛んになった「子供の命と健康を守る」。まずそのことを考える社会にしよう」という全国の母親の動きは、価値観の転換を迫る「お母さん革命」として、児玉教授のメッセージでも強調された。その担い手の一つ、埼玉県の市民団体「SCR（みさと）」からは、ホットスポットとなった地域での取り組みの一端が報告された。また、活動地域でのアンケート結果からは、医療者に対し、低線量被ばくによる健康影響について先入観のない診療、まず傾聴し共に考える姿勢が、強く求められていることが明らかになった。

不十分な疫学調査

疫学者である津田敏秀教授（岡山大学環境学研究所）の講演では、まずICRPの直線モデルの原則が確認されたが、あわせて、ICRPモデルに見られる疫学的不十分と米国のアカデミーからの批判も紹介された。また、今回の事故は、被ばく者個人に益が全く生

じない一般公衆被ばくであり、医療被ばく・職業被ばくより厳密な正当化・最適化が必要なのは自明との指摘もあった。福島県では、今後何十年にもわたる健康調査が計画されているが、疫学調査として見た場合、現時点では、将来の分析疫学が成果をあげるために、記述疫学（放射線への曝露と症状・事象出現の記載）を、最大限進めることが大切である。現行の官製調査は、残念ながらその点十分と言わざるを得ない。

臨床家も積極的関与を

今回の事故での情報の隠匿や操作は、SPEDIの公表の遅れに象徴され、市民団体のアンケートでも、低線量被ばくについては、医療者との間で、双方向性の情報ネットワークが望まれている。反核医師の会のメンバーには、原爆被ばく者の診療や認定に積極的に取り組んできた臨床家からも指摘された。また、晩発性放射線障害について

つかる中、対象は福島県民に限っていいのか、といった問題や、持続性低線量被ばくでの健康障害に定説がない中、国内の公害病や薬害の認定で繰り返されてきた、調査結果の恣意的解釈が繰り返される危険性はないのか、といった疑問が生じるのは当然である。

「科学者は市民でなければならぬ」

松井氏は今日のゆがめられた核医学・核政策の底流に731部隊の残滓があることを指摘、真実を隠し内部被ばくを軽視する学者・医師を糾弾した。チェルノブイリ事故の3年後から甲状腺癌、10年後から乳癌が増加しているデータを示し、低線量内部被ばく・晩発性障害の危険性を説いた。

国際的に最も権威があると言われている国際放射線防護委員会（ICRP）は内部被ばくを軽視していることを指摘、ICRPの内部被ばくに関する委員会が初代委員長を務めたカール・モーガン氏の著書をひいて説明した。そしてその誤謬を正すヨーロッパ放射線リスク委員会（ECRR）の活動を紹介した。

第3分科会

矢ヶ崎氏 松井氏
内部被ばくテーマに講演

核戦争防止・核兵器廃絶を求める
山梨県医師・歯科医師の会

林 武之輔



第3分科会は「内部被ばく」について行われた。矢ヶ崎克馬・琉球大学名誉教授、松井英介・岐阜環境医学研究所所長の講演をもとに開始した。

放射線による免疫力低下、
遺伝子の変化と癌化

矢ヶ崎氏の講演は、「あのままに被ばくを見る」ということから始まった。



第3分科会内で内部被ばくについて講演する矢ヶ崎氏（左）と、松井氏

内部被ばくはこれまで意図的に隠蔽され歪められてきた歴史があるためだ。広島・長崎での原爆による被ばくについても日本政府は、内部被ばくはなかったとの態度をとり続け、被ばく者に多大な苦悩をおしつけた。内部被ばくを正しく理解すること、そして隠そうとしている政府・科学者に認めさせることの重要性が述べられた。

実証されている。こどもなど若い人ほど放射線の影響は大きいことはよく知られているが、放射線が人体に与える免疫力の低下は、エイズ・肺炎などの感染症でぎりぎりの命を奪っている人の命を奪っているという人が提示された。放射線はその強いエネルギーで徐々に電離する。細胞が放射線によって受けたダメージを修復し生きのびようとするにより遺伝

子の変化や癌化を引き起こす、と説明した。「科学者は市民でなければならぬ」

時事モニター

第6回 米戦略、太平洋中心にシフト
——日本の対応は——

た軍事演習・訓練が行われたというべきである。

防衛省・自衛隊は多国間共同の中で役割を果たす準備を進めている。2012年度予算で無人機の開発、軍事情報・偵察衛星システムの構築、GPS衛星システムを補完しその位置精度を飛躍的に向上

させる準天頂衛星システムの構築の具体化などが、その一例である。

2012年には憲法が規定する平和主義を日本が守れるか、それが試される年となる。

2011・12・18 T H)

オバマ大統領はイラク戦争の終結を宣言した。米軍は12月18日、大使館警護要員を残して、全員が陸路で隣国クウェートに出国した。

他方、オバマ米政権は経済・外交両面で軸足をアジア太平洋地域に移す大転換に踏み出した。TPP問題と並んで、日本にとって看過できないのは、米海兵隊をオーストラリアに駐留させることに米豪両政府が合意したことである。中国の太平洋進出に對抗したものと見られている。「ア

ンサス同盟」を復活させ

るものとなる。

東アジアでは太平洋や日本海など日本周辺地域で11月に海上自衛隊と米海軍の共同訓練、日韓合同海上訓練、陸海空三自衛隊の統合実動演習が立て続けに行われた。実質的に日米韓三国の連動し

る。

陸海空自衛隊が全国の部隊を九州・南西諸島方面に集中動員した統合実動演習は新「防衛計画の大綱」が打ち出した「動的防衛力」の具体化を米

国との連携を視野に入れながら行ったものと防衛省は明言している。

各地の反核医師の会から

愛媛県

佐藤栄佐久前福島県知事の講演会を企画して

反核医師の会常任世話人 曾根康夫



10月2日松山コムズにて講演会「福島原発の真実」(愛媛県保険医協会・反核医師の会主催)が開催され、240人が参加した。参加者は会員や学生から市民運動家まで広汎で、講演後も活発な質疑応答があり熱気にあふれた会となった。演者は在任中から福島原



動は白紙です」と言い続け、自らが調査・判断することを放棄している。

②「原子力は宇宙の創世記のエネルギー。原爆でも原発でも人類は神の領域に踏み込むべきではない……原発を推進する人は何かの時に原爆が作れるように、との『すけべ心』があるのではないか」

6月に総会と「第23回つどい」

核戦争に反対する医師の会2012年度総会と、「第23回核戦争に反対し核兵器の廃絶を求める医師・医学者のつどいin東京」が6月9日(土)、10日(日)の両日、東京・文京区の平和と労働センター全労連会館2階ホールで開催される。「つどい」では、核兵器廃絶や原発問題について講演会やシンポジウムを予定しており、各分野の運動

を交流しながら、今後の国内外での共同した活動を展望する。

▽9日午後6時〜9時 全国世話人会▽10日午前9時30分〜午後4時 第23回核戦争に反対し核兵器の廃絶を求める医師・医学者のつどいin東京▽会場 平和と労働センター全労連会館2階ホール(東京都文京区湯島2-14-4、03-5842-5610)

核兵器がだめで原発が良いはずがない。原発も原爆も核分裂する核燃料を製造する同じ技術だ。IAEAが保障する「核平和利用の権利」を利用して核兵器をめざす国があり、原発がある限り世界は核兵器

の恐怖から逃れることができない。

会の開催にあたり事務局は、愛媛県の全県議・地方自治体議員に案内チラシを送り、県庁の門前でのチラシ配布も行って参加者の幅を広げることをめざした。保守系の市議が興味を示し

学生部会コーナー

つどいの熱気に感動と興奮 新たな学生部会に期待を!

反核医師の会学生部会代表 京都府立医科大学2回生 松野 結



私にとって今回のつどいは、学生部会代表として初めて迎える本番だったの

で、始まる前まではプレッシャーを大きく感じていました。しかし、いざ会場に入ると久しぶりに会う友達

がそこにはいて、「役職に関係なく、まず、いち参加者としてつどいを楽しむことが最も大切なのだ」と少

しホッとすることができました。開会直後、戦争の悲惨さを改めて痛感したのは、斉藤とも子さんの詩の朗読、そして肥田舜太郎先生らと交えたシンポジウムでした。次に来る「では核兵器を

実際になくすために、現在進行形で、どのような議論、アプローチがなされているのか?」という疑問、その現場を垣間見ることができたのが国会議員のシンポジウムです。個人的に前のめりになって聞き入って

しまいました。なぜなら彼らは、いつもテレビで見ると政治家の姿とは違い、自分の信念に従って、党の枠を超えて、一歩一歩理想に近づいたための行動を起こしていることが分かったからです。純粹に、感動しました。

さらに分科会では、この1年間ずっと自分の中でテーマにしていた問題意識の、「まさにこれだ!」というヒントと巡り合うことができ、あまりに嬉しく、興奮してしまったほどです。学び、気づきの楽しさ



レセプションで学生が舞台上に集合。肥田舜太郎氏(右から2人目)が激励した。

を教えてくれた、プライスレスな時間でした。

さて、今回全国から集まった学生は30人弱で、レセプション時にみんなで舞台上に立つたときは、自分でも「漲る学生のパワー」を感じました。普段はなかなかもつと会うことは難しいかもしれないけれど、こうして一つの課題に興味を持つて、行動を起こそうとする同じ世代の仲間が全国にいることが、どんなに心強いことかは言うまでもありません。学生にはもつともつと可能性が秘められている。この思いで私は、次期学生部会代表に引き続き立候補しました。副代表は、去年同じ新入生として出会った気が置けない2人です。これから新たに作り上げる、フレッシュな学生部会にご期待ください。

書評

核戦争防止千葉県医師の会世話人 川村 実

『隠される原子力 核の真実』 小出裕章 著



幻冬舎ルネッサンス新書 838円+税

『原発はいらない』 小出裕章 著

『隠される原子力 核の真実』原子力の専門家が原発に反対するわけ』

「原発はいらない」は同

原発事故から4カ月後に緊急出版したものの。序章では著者が40年間原発に反対してきた理由として「原発こそが環境汚染の元凶」であることを挙げ、研究から反原発運動、原発廃絶運動へとすすみ、

「隠される原子力 核の真実」原子力の専門家が原発に反対するわけ』は京都大学原子炉実験所助教である著者のそれまでの講演記録などを直して編集したもので、東京電力福島第一原子力発電所の地震・津波による事故が起きる3か月前に出版された。著者が東北大学工学部原子核工学科に入学した後、なぜ東北電力は仙台から60kmも離れた女川に原発をつくるのか、という素朴な疑問から始まり、原子力発電所の危険性を40年間に渡って告発してきた記録である。

「原発はいらない」は同原発事故から4カ月後に緊急出版したものの。序章では著者が40年間原発に反対してきた理由として「原発こそが環境汚染の元凶」であることを挙げ、研究から反原発運動、原発廃絶運動へとすすみ、

京都大学原子炉実験所の仲間とともに不屈の闘いを続けてきた経緯を述べている。福島第一原発の今後の予想、他の日本列島の原発やプルサーマル発電、再処理工場の危険性についても解説し、原発問題に関するQ&Aも分かりやすい。最終章「未来を担う子どものために、大人がやるべきこと」では、細胞分裂が盛んな子どもの時期は大人の4倍も放射線感受性が高いので、子どもの身近な環境の除染対策をすること、さらに原発事故に何の責任もない子どもたちを被爆から守る当然のことについて述べている。原発、推進派も反対派も相応の責任がある。大人たちが取れる全てのことをすすべきである。ぜひご一読を。



創史社 1400円+税